アレルギーリスク低下か

乳児期に親と唾液接触

獨協医大など小中生3570人調査

獨協医大や和歌山県立医科大などの研究グループは31日までに、乳児期に親の唾液と接触があった子は、6～15歳の学齢期にアトピー性皮膚炎やアレルギー性鼻炎の発症リスクが低下したとの調査結果を発表した。親の細菌が子の免疫系を刺激し、予防効果につながった可能性があるという。

研究グループは両大などの9人で、本県では獨協医大小児科の吉原重美主任教授が中心的に関わった。

調査は2016～17年、栃木市の小学校3校と中学校2校の児童生徒1852人と、石川県内の児童生徒1718人の計3570人とその保護者を対象にアンケート用紙を配布して実施。生後12か月未満の乳児期に食器の共有など唾液の接触があったかどうかや、学齢期にアレルギー疾患を発症したかなどを聞いた。

その結果、乳児期に食器を共有する唾液接触があった場合は、なかった場合に比べ学齢期のアトピー性皮膚炎の発症リスクが低くなる結果が出た。子どものおしゃぶりを介した唾液接触ではアトピー性皮膚炎とアレルギー性鼻炎の発症リスクがそれぞれ減少した。

乳児期の唾液接触には虫歯の原因になり得る菌への感染リスクもあるが、研究メンバーの歯科医は、歯が生える前の生後1、2か月までであればリスクは低いとの考えを示した。

吉原主任教授は取材に対し、「アトピー性皮膚炎やアレルギー性鼻炎の発症リスク低下の可能性が示されたことは意義深い。今後は低減のメカニズムを解明し、予防にどういかしていくかが研究課題になる」と話した。

（栃木澤良太）